

村上春樹「ねむり」論

——一九八〇年代の主婦像をめぐる——

桑野 加奈子

一. はじめに

村上春樹「眠り」は、一九八九年一月に「文學界」（文藝春秋）に発表された作品である。『TVデビュー』（一九九〇年、文藝春秋）に収められた後、全面的な改稿がなされ、二〇一〇年にタイトルを『ねむり』（新潮社）に変更し、単行本として出版された。本論では改稿後のテキストを用いる。

「ねむり」の主人公である「私」は夫と息子がいる専業主婦である。何も不満などない、幸せな日々を過ごしているはずだった「私」は、ある日突然不眠になってしまい、眠らない日々を過ごす。しかし、「私」は疲労を感じることもなく、むしろ意識は覚醒していく。不眠状態で過ごす日々の中で、「私」は徐々に不眠になる前の日々疑問を抱くようになっていく。

この奇妙な「不眠」に陥った「私」が一体どのような主

婦として描かれているか、「私」は何を意味しているのか考察を行っていく。

なお本論で対象とする主婦とは、「家事責任を負う既婚女性」を意味する。

二. 一九八〇年代の主婦について

「専業主婦」ということばは、ほとんどすべての女性が結婚し、家庭に入り、主婦となることを理想とし、あるいはそれ以外の道が閉ざされていた戦前には存在しなかった。戦後になり、男女の教育機会の均等が進み、それにもない職業を持つ女性が増えた。元来家庭にあるべき主婦の中にも働く人が増えてきたために、家庭の中だけにいる主婦を「専業主婦」と呼んで、働く主婦と区別するようになった。

一九八〇～一九九〇年の女性の平均初婚年齢は二五歳前後であり、二〇〇三年の平均年齢が二七、六歳であるのと

比較しても、現在より若くして結婚していたことが分かる。また、一九七八年に読売新聞社が三〇〇〇人の女性を対象に行った調査では、「結婚しないでも女性は幸福に暮せるか」という質問に対し、過半数が拒否反応を示した。ここから「女の幸福は家庭」という考えが根強く残っていたことが分かる。また、未婚女性の理想のライフコースに関して、作品発表時に近い一九八七年において「専業主婦」になることを理想としている女性の割合が三四%、結婚や出産を機に仕事をやめても「再就職」したいと考える女性の割合が三一%、仕事と家庭の「両立」を理想とする女性の割合が一九%といったデータがある。ところが二〇〇二年には「再就職」が三七%、「両立」が二八%、「専業主婦」は一九%となった。現在と比較しても、一九八〇年代は「専業主婦」になることが女性たちの理想であったことが分かる。幸福を手に入れるために女性たちは、結婚し、家庭に入り専業主婦になることを望んでいたのである。

また、女性は家庭に入れば家事をすることとなる。一九八〇年の女性の家事時間（平日）の平均は四時間二八分、一九八五年では四時間一九分と、家電の普及が進んだ二〇〇二年が三時間四九分であるのと比べ、三、四〇分長いことが分かる。一方男性の家事時間（日曜）の平均は一時間ほどであり、女性との差は大きい。

結婚して家庭に入ること＝幸福という考えが一九八〇年

代にはあったこと、女性の家事時間が長かったことをふまえて、「ねむり」における「私」がどのような主婦として描かれているか分析、考察していく。

三、「私」の苦悩

(一) 不眠になる前の「私」について

「私」がなぜ不眠に陥ったかを考察していくうえで、「私」の結婚してからの日常がどのようなものであったかを、まずは次の引用部分に注目して分析していく。

「僕がハンサムなのは僕の罪じゃない」と夫は言つて微笑む。いつも同じ繰り返し、それは私たちの間でしか通用しないつまらない冗談だ。(一)

「私」が夫といつも同じ冗談を繰り返していることが分かる。

彼は朝の八時十五分にクリーム色のブルーバードに乗ってマンションの駐車場を出る。(中略)「気をつけてね」と私は言う。「大丈夫」と彼は言う。いつも同じ台詞の繰り返しだ。(一)

「私」は毎日夫と同じ冗談、台詞を交わしており、それ

は当たり前前のもとなつてゐる。このやりとりは特別なものでなく、夫との日々は何の変化もないということが分かる。その中で「私」にとつて夫の存在は当たり前前のもとなつていったらう。

そんな夫がどのような人物であるかが、以下から分かる。

でも彼は世間のおおかたの人に好感を持たれた(中略) 多くの人々は彼と会つて話していると、知らず知らず安心感を抱いてしまうようだ。(中略) 私の女友だちも、みんな彼のが気に入つてゐる。もちろん私だつて彼のが好きだ。愛してゐると思つて、でも正確に表現するならば、とくに「気に入つて」はいないと思つて。(1)

「私」の夫が、人から好かれる人物であることが分かる。「おおかたの人に好感を持たれた」り、「安心感を抱」かせたり、歯医者としても成功してゐたりと、夫は「文句のつけようがない人間」として描かれてゐる。しかし「私」は愛してはゐるが「気に入つて」はいないという。それは夫に対して「気に入らない」ところがあるからである。それに関しては後述する。

また、「私」は夫の顔を絵に描こうとしてみたが、うまく思ひ出せないということが以前あつた。夫の顔に對し「暖

味なイメージしか持てないのは、夫が『私』の心に明瞭な像を結ぶほどの存在感をもたらししていない」からである。これは『私』は、実際には夫と充分な信頼関係を築くには至つていないことを反映してゐる」と考えられる。

二人の夫婦生活については以下のように書かれてゐる。

もつと前、まだ診療所を始めて間もないころには、午後一番の予約が入つていないことが多く、そういう時、私たちは昼食のあとよくベッドに行った。(中略) 私たちは今よりもつと若く、もつと満ち足りてゐた。今でももちろん私たちは満ち足りてゐると思つて。家庭にはトラブルの影ひとつない。私は夫のことが好きだし、信頼してゐる。(中略) でもこれは仕方ないことだが、歳月とともに生活の質は少しずつ変化してゐる。ものごとは前ほどシンプルではなくなり、私たちをとりまく制約はより入り組んだものになつていく。(1)

「私」は過去の生活を回想し「満ち足りてゐた」と言ひ切つてゐるが、現在については「満ち足りてゐると思つて」という表現になつてゐる。「家庭にはトラブルの影ひとつなく、「夫のことが好きだし、信頼してゐる」という現状が「満ち足りてゐる」と思つてゐるのであつて、心からの

幸せを感じているわけではないのだろう。そうなってしまったのは「歳月とともに生活の質」が「少しずつ変化していく」き、二人を「とりまく制約」が「より入り組んだものになつた」からである。夫婦として過ごしていく中で、息子が生まれ、妻、母として日々を過ごす「私」には様々な「制約」が増えていったのだろう。

そして「私」は不眠になる前の生活について以下のように述べている。

それが私の生活だ。つまり、眠れなくなる前の私の生活だ。毎日がほとんど同じことの繰り返しだった。

私は簡単な日記のようなものをつけていたが、二三日つけ忘れると、どれがどの日だったか区別がつかなくなってしまう。 (中略) 私はただ単に驚いてしまうだけだ。昨日と一昨日の区別もつかないという事実。そういう人生の中に自分が組み込まれてしまっているという事実。自分のつけた足跡が、それを認める暇もなく、あつという間に風に吹き払われていくという事実。そういう時、私は洗面所の鏡の前に立って、自分の顔をじっと眺める。十五分くらい頭の中を空っぽにして、自分の顔を純粹な物体として観察する。そうすると私の顔は、だんだん私自身から分離していく。そしてたまたま、一カ所に同時存在している別個のもの

になつてしまう。そうだ、これが本当の現実なんだ、と私は認識する。足跡なんかどうでもいい。この同時存在を今のまま維持していくこと、それが何より私に求められていることなのだ。(1)

不眠になる前の「私」の生活が、日々の区別がつかなくなってしまうほど毎日同じ繰り返しだったということが分かる。過去の自分がつけた「足跡」、つまり、ありのままの自分が歩んできた人生という道につけた「足跡」は、自分が妻、母として過ごす日々の中に組み込まれてしまっていることに気づかぬまま「あつというまに風に吹き払われていく」のだ。

「私」は自分の顔、つまり自己の肉体を、「私自身」、つまり自己の意識と「たまたま、一カ所に存在している別個のもの」として見ている。「私」の肉体と意識は表裏一体のものではなく、別物なのである。ここでいう自己の肉体は、妻、母として存在する「物体」としての「私」、自己の意識は妻、母としてではないありのままの自分として意識の中に存在する「私」と考える。鏡を見つめているうちに、妻、母として存在する「私」(自己の肉体)と、そうでないありのままの自分(自己の意識)は分離していき、それにより、「私」は肉体と意識は「たまたま」同時存在しているのだという「本当の現実」を認識するのである。そして「私」

は「足跡なんかどうでもいい」と感じる。これは、ありのままの自分が歩んできた人生を否定していることになる。そして、ありのままの自分が歩んできた人生を否定した「私」は、肉体と意識の同時存在を維持することが自分に求められていることだと認識する。

結婚してからの「私」には妻、母という役割と責任ができた。しかしその一方で意識の中には何にも縛られないありのままの自分がいる。その二つの自己の存在に「私」は気づいているのだ。

結婚してからの「私」の日常はとにかく毎日同じ繰り返しだったようだ。その日常の中にありのままの自分というものが「組み込まれてしまった」ということに注目し、不眠になってからの「私」について分析していく。

(Ⅱ) 不眠になってからの「私」について

次の場面では「私」の不眠が始まった夜が描かれている。ある夜、金縛りに遭い、「私」は自分の足に水をかけ続ける老人を見る。

これは夢じゃない、と私は思った。私は夢から覚めたのだ。それも漠然と覚めたのではなく、はじかれるように覚めたのだ。だからこれは夢ではない。これは現実なのだ。(2)

「私」はこの悪夢のような出来事を「現実」と捉えている。「これは現実なのだ」と強調されていることから、この不眠の始まりは「私」にとって「単なる悪夢ではなく、強烈な覚醒の体験」であったことが分かる。この覚醒は「私」が、自己が日常に飲み込まれていることに気づき、ありのままの自分の回復を求め始める「目覚め」であると考えられる。この金縛りに遭い、「私」は足元に老人が立っているのを目にする。「私」はあまりの恐怖に悲鳴を上げる。

私は目を閉じて、これ以上はあげられないくらい大きな悲鳴をあげた。

でもその悲鳴は外には出なかった。(中略)その無音の悲鳴は私の体内を駆けめぐり、私の心臓は鼓動を止めた。頭の中が一瞬真っ白になった。私の細胞の隅々にまで悲鳴は滲みとおった。私の中で何かが死に、何かが溶けた。爆発の閃光のように、その真空の震えは私の存在に関わっている多くのものを、根こそぎ焼きはらった。(2)

恐怖のあまり「私」は悲鳴を上げる。だがその悲鳴は「外には出なかった」。この「悲鳴」には「私」が妻、母として、同じ日々を繰り返すことで生じた苦しみが表れていると考える。しかし、「悲鳴」は外に出ない。苦しみが誰にも理

解されず、そして「私」自身にもどうすることもできないということを表しているのではないだろうか。その苦しみが「体内を駆けめぐり」、「私の存在に関わっている多くのものを、根こそぎ焼きはらった」のである。

「私」は現在、妻、母として「存在」している。とすると、ここでの「私の存在に関わっている多くのもの」とは、後述するが、妻、母という「私」の「存在基盤」(4)のことだろう。それを「私」は「根こそぎ焼きはらってしまった」のである。これは、「私」が後ほど夫への愛や息子への母性愛を失ってしまった、「存在基盤」を捨て去ってしまったことを示唆しているのではないだろうか。

次に「私」がまだ結婚していなかった頃に好んでいた「お酒」、「読書」、「チョコレート」についての記述を見ていく。

私はお酒を飲むことはほとんどない。夫のように体質的に飲めないというのではなく、昔はそれなりに飲みましたのだが、結婚してからはほとんど飲まなくなりました。(2)

「私」は結婚する前はお酒を飲むことがあった。しかし、結婚してからは「ほとんど飲まなくなつた」とある。それは結婚し、妻、母となり日々を過ごしていく中でいつの間にか「自分の時間」を失ってしまったからだろう。

続いて「読書」についても、以下のように書かれてある。

こんな風に腰を据えて本を読むのはいったい何年ぶりだろう、と私は思った。もちろん午後の余つた時間に三十分か一時間本を開くことはある。でもそれは正確には読書とは呼べない。本を読んでも、私はすぐにべつのことを考えてしまう。子供のこととか、買い物のこととか、(中略)そんないろんなことが頭に浮かび、それがあちこちの方向に枝葉をのばしていく。気がつくとき時間だけが経過して、ページはほとんど前に進んでいないということになる。(2)

「私」は「何年ぶり」か分からないほど久々に読書をしている。普段も読書をすることはあるが、その途中にも「子供のこと」や「買い物のこと」などを考えて読書に集中できていない。「私」が妻、母としての役割に縛られて、知らぬ間に時間が過ぎてしまっていることが分かる。

私はそのようにして、いつの間にか本を読まない生活に慣れてしまった。あらためて考えると、それははいぶん不思議なことだった。子供のころからずっと、本を読むことは私の生活の中心になっていたからだ。小学生の時から図書館の本を読み漁ってきたし、お

小遣いはほとんど全部本代に消えた。食事を削って、そのお金で読みたい本を買って読んだ。中学でも高校でも、私くらい本を読む人間はいなかった。(2)

ここから「私」がいかに読書が好きだったかということに分かる。「本を読むことは私の生活の中心」だった。自分の「生活の中心」とまでいえるものを、結婚してからいつの間にかしなくなってしまう。結婚後の日常生活が「私」の生活を大きく変えたのだ。

続いて、「チョコレート」についての記述である。

私は何かを食べながら本を読むのが好きだった。そういえば、結婚して以来チョコレートも食べなくなってしまった。甘い菓子を食べることを夫が嫌うためだ。子供にもほとんど与えない。だから家には菓子の類は一切置いていない。(3)

このように「私」はお酒を飲むこと、読書すること、菓子を食べながら本を読むことなど、結婚前の自分がよくしていた、あるいは好んでしていたことを、結婚後は自然としなくなってしまうことが分かる。「私」の欲望は結婚後、知らぬ間に抑圧されていたのである。

以下は金縛りに遭ったあと、「私」が久々に読書する場

面である。

このままいつまでも本を読み続けられそうだが、話はどうなるか、続きが読みたくて仕方ない。でもいくらなんでも、そろそろ眠らなくてはならない。

以前不眠に悩まされた時期のことを思い出した。

(中略)あの時は私はまだ学生だった。だからなんとかやっていけたのだ。でも今はそうじゃない。私は妻であり、母親である。そこには責任というものがある。夫の昼食も作らなくてはならないし、子供の世話もある。(2)

「私」はこのまま読書が続けたいと思う。しかし、学生時代とは異なり、現在の「私」は妻であり、母である。そのため「夫の昼食を作る」ことや、「子供の世話」などの家事をこなす責任がある。妻、母であるがゆえに「私」は「眠らなくてはならない」のである。「私」の好きなことができる時間が、妻、母としての役割のために奪われてしまっていることが分かる。

次に、不眠になってからの日常における「私」の生活について見ていく。

それがセックスの誘いであることに気づいたのは、

彼が立ち上がって私をベッドに誘った時だった。でも私は全然そんな気にはなれなかった。どうして今こゝでそんなことをしなくてはいけないのか、理解できなかった。私は早く本に戻りたかった。(中略)私は食器を洗いながら、ずっとヴロンスキーという人間のあり方について考えていたのだ。(3)

不眠になってからの「私」は夫の誘いに對し、「どうして今こゝでそんなことをしなくてはいけないのか、理解できなかった」。「まだ診療所を始めて間もないころ」と比べて、夫との時間が幸せなものではなくなり、夫への愛情が失われつつある。それより「早く本に戻りた」い、つまり自分の好きなことをしたいのである。食器を洗うという妻、母としての役割をこなしているその間も、「私」の心は本のことではないのである。その後の医療器具に関する夫の話に對しても「ときどき相槌を打ったが、ほとんど何も聞いていなかった」とあり、夫に對しあまり興味・関心がないうことが分かる。

また、不眠になる前にも夫の顔を絵に描いてみようとして、思い出せないということがあった。不眠になる前から「私」の意識が夫にそれほど向いておらず、毎日共に過ごしていく中で、夫の存在が当たり前のものになっていることが分かる。しかしこの時「私」は夫の顔が思い出せない

ことに「不安」を感じていた。それに対し現在は自分の意識が夫にそれほど向いていないことに対し、「不安」を感じてはいない。

夫への愛情を失いつつある「私」が妻、そして母としてどのように生活しているかが以下から分かる。

私は義務として買い物をし、料理を作り、掃除をし、子供の相手をした。義務として夫とセックスをした。慣れてしまえば、それは決して難しいことではなかった。むしろ簡単なことだった。頭と肉体のコネクションを切つてしまえばいいのだ。(中略)私の体がほとんど自動的に動いているあいだ、私の頭はよその空間を漂っていた。私は何も考えずに家事をこなした。子供におやつを与え、夫と世間話をした。(4)

「私」は妻、母としての役割を「義務」と捉え、「何も考えず」に果たしている。「私」は「頭と肉体のコネクションを切つて」、それらの役割をこなしている。「私」は学生時代にも不眠を経験しているが、その時は「強い風が吹いたら、私の肉体は世界の果てまで吹き飛ばされてしまいうだった。(中略)そして私の肉体はそこで私の意識と永遠にはなればなれになってしまふのだ。だから私は何かにしっかりとしがみついていたかった。」(1)と、肉体と意

識が離れてしまうことに不安を感じていた。

しかし、現在の「私」は自ら肉体と意識を切り離している。これは、前述したが、「私」があのままの自分(意識)と、妻、母として存在する自分(肉体)を「たまたま、一カ所に存在する別個のもの」として捉えているからである。意識と肉体を切り離した「私」は「義務的に機械的に」日々を過ごしている。それにより「現実というは何とたやすいのだろう」と感じている。「機械を動かすのと同じ」ように「現実」を過ごしている。そして、過去の不眠とは異なり、現在は日常に「ときどきの変化」があっても「それらの出来事はどれも私の存在を揺り動かしはしない」と、不眠であっても自己の存在を確かなものとして感じていることが分かる。

一方で「私」が不眠であるにも関わらず、夫も息子も姑も「いつもと同じように私と接して」おり、その変化に気づかない。「私」が家庭内での役割を全うしていれば、夫や息子、姑は何も気づかないのである。「私」はありのままの「私」ではなく、妻、母、そして嫁としてしか見られていない。

こうして不眠状態が続き「間断のない覚醒が二週目に入った時」(4)、「私」はさすがに不安を感じるようになる。しかし、不眠になってから自分の体が生命力にあふれ、綺麗になつていくことを知る。

私の場合、眠れなくなつてからもう一週間たつていいる。それなのに私の体はちつとも衰弱していない。むしろいつもより元気なくらいなのだ。

私はある日シャワーを浴びたあとで、裸のまま全身鏡の前に立つてみた。そして自分の体の線がはちきれんばかりの生命力をたたえているのを発見して驚いてしまった。(中略)私の体はもろん少女時代の体つきとは違ったものになつていた。でも私の肌は昔に比べてずっと艶があり、はりがあつた。(4)

過去とは異なり現在の「私」は自分自身で肉体と意識を切り離している。また、自己の存在を確かなものと感じている。そして、ここでは自分の体が綺麗になつていくことを知る。「肌は昔に比べてずっと艶があり、はりが」あるなど、女性としての美しさを手に入れている。このことから「私」は現在の不眠を肯定的に捉えるようになったと考えられる。

不安を感じた「私」は医者に行くことも考える。しかし様々な検査や実験をされることを想像し、そのようなことには耐えられないと感じる。

そんなものにとっても我慢できそうになかつた。私はひとりで静かに本を読みたかつた。プールに行つて一

時間しつかりと泳ぎたかった。それが私の求めていることだ。(4)

好きな本を読むこと、体型を維持するために泳ぐこと、つまり自分の好きなことができる自分のための時間、自由を求めていることが分かる。

不眠により自分の時間を手に入れ、不眠を肯定するようになった「私」は眠りについて書かれた「ある本」に出会う。

ある本に面白いことが書いてあった。人間は思考においても肉体の行動においても、一定の個人的傾向から決して逃れることはできないと、その著者は述べていた。(中略)つまり人はそのような傾向の檻に閉じ込められて生きていくわけだ。そして眠りこそがそのような傾向のかたよりを(中略)中和するのである。(中略)眠りは人というシステムに宿命的にプログラムされた行為であって、誰もそれをパスすることはできない。もし眠りを失えば、人の存在そのものが存在基盤を失ってしまうことになる、著者はそう主張していた。

傾向？ と私は思った。

傾向という言葉から私が思いつけるのは家事のこと

だった。私が無感動に機械的につづけている様々な家事作業。(中略)そのようにして、私は靴の踵が片減りするように傾向的に消費されていく。それを調整しクールダウンするために日々の眠りが必要とされる。

(4)

「ある本」から「私」は、人間は傾向的に行動し、眠りはその傾向のかたよりを中和するための行為だという示唆を得る。それは人というシステムにプログラムされた行為で、そのプログラムから外れてしまえば「存在そのものが存在基盤を失ってしまう」とあった。

そして、「傾向」という言葉から「私」は日常の家事のことを思いつく。「私」の存在は妻、母という「存在基盤」により成立しており、家事という「傾向」から逃れられない。「私」は自身にとって無意味な、「無感動に機械的につづけている」家事という「傾向」により消費され、それをクールダウンするために眠るのである。そのような示唆を得た「私」は以下のように思う。

それでは私の人生とはいったい何なのだろう？ 私には傾向的に消費され、そのかたよりを調整するために眠る。それが日々反復される。朝が来て目覚め、夜が来て眠る。その反復の先にいったい何があるのだから

う？何かはあるのだろうか？（中略）たぶん何も無い。ただ傾向と是正とが、私の体の中で果てしない綱引きをしているだけだ。

眠りなんかいらぬ、と私は思った。眠れないことで私が「存在基盤」を失うとしても、仮に発狂するとしても、それでもいい、かまわない、私はそう思った。私は傾向的に消費なんかされたくない。（中略）そしてその傾向的消費のもたらすかたよりを正すために、眠りが定期的に訪れ、一日の三分の一を私に要求するのだとしたら、そんなものはいらない。私には私自身の方法がある。私は本を読む。私は眠らない。（4）

妻、母という「存在基盤」のもと、家事を機械的に、義務的にこなし、自分が「傾向的に消費され」、それを調整するために眠る。「私」は傾向的に消費されたくないと考え、人生が傾向的消費と調整の繰り返しであるならたとえ発狂しても、「存在基盤」が失われてしまっても、自分には眠りには必要ないと考えるようになる。

現実においての「私」は妻、母という「存在基盤」の上で、役割を全うし「私」は存在している。不眠の肯定は、その「存在基盤」を捨て去ることを意味することとなる。私は「存在基盤」を捨て去っても、ありのままの自分であること、自分の好きなことができる自由を求めることをこ

こで選択したのだ。

その後「私」の考え方は大きく変化する。

そのようにして、私は眠れないことを恐れなくなつた。何も恐れることはない。要するに私は人生を拡大しているのだ、と私は思った。夜の十時から朝の六時までの時間は私自身のためのものだった。その一日の三分の一に相当する時間はこれまで眠りという作業に（中略）費やされていたのだ。でもそれは今や私自身のものとなった。誰のものでもない。私のものだ。私はその時間を私の好きに使うことができる。誰にも邪魔されず、何も要求されず。（5）

こうして「私」は眠れないことを恐れなくなる。眠るために費やしていた時間を、自分の好きなことをするために費やし、「人生を拡大している」と考えるようになる。そのことに手応えを感じ、「誰にも邪魔されず」、「何も要求され」ることのない時間に生きている実感を得ている。

「私」が今、何日も眠っていないことは、「正常なことでは」なく、もしかしたらその代償として自分が「早く死ななくてはならない」としても「私」は構わないと感じている。不眠になる以前は傾向的に消費されていたが、今は自分の好きなことをして、「消費されていない部分」の自分を感じ

じている。「私」にとつてはそれがまさに「生きる」ということなのだ。

そして「私」の夫に対する気持ちも変わっていく。

私はそこに立ったまま、彼の寝顔を眺めていた。(中略) 目の下のほくろがいやに大きく、下品に見えた。

目の閉じ方もどことなく品性がなかった。臉がたるんで、色褪せた肉の覆いのように見えた。まるで阿呆みたいに眠っている、と私は思った。まるで阿呆みたいに眠っている。(中略) 結婚したころは、この人はもつとほりのある顔をしていた。同じ熟睡するにしても、こんなだらしない寝顔はしていなかった。(5)

夫への愛情を失いつつあった「私」は、夫の寝顔を眺めて夫に対する嫌悪感を抱く。ここには「これまで彼女が抱いていたはずの、夫の容姿に対する好意的な感情が完全に消去されており、強い嫌悪感を示す否定的な表現が並べられている」^五。眠らず自己を拡大し、生命力にあふれる「私」に対し、夫は日常の中で傾向的に消費され、醜くなっている。夫はそのようなことは考えず、日々を過ごし、熟睡する。その姿に「私」は嫌悪感を抱いたのだ。

結婚して間もない頃は「よく意味もなく」、夫の寝顔を眺め、夫が「平和に眠っているかぎり、私は無事に守られ

ている」(5)と感じていた。しかし、「私」はあることをきっかけに夫の寝顔を見なくなってしまう。それが以下に書かれてある。

でもいつからか、私はそんなことをするのをやめてしまった。いつからだっけ？ あれはたぶん子供の名前をつけることで、私と夫の母親のあいだにいさかいがあった時からだったと思う。(中略) かなり激しい言い争いだった。でも夫はそれに対して何の意見も言えなかった。どちらの側につくこともなく、ただ隣で私たちをなだめているだけだった。

私はその時に、夫から守られているという実感をなくしてしまったのだと思う。そう、夫は私を守ってはくれなかった。そのことで私はずいぶん腹を立てた。義母よりもむしろ夫に対してより腹を立てた。(5)

夫の寝顔を見ると「守られている」という安心感を得ていた「私」だったが、義母とのいさかきをきっかけに見なくなる。言い争いをする「私」と義母を、夫はただ「なだめているだけ」で、「私」を庇いはしなかった。この時、夫が何もしてくれなかったことで、「私」は夫から守られているという実感を失う。関係は修復され、その後も結婚生活は続いた。時間が経つにつれ、この出来事を忘れつつ

あったが、心のどこかに夫に対する不満が残っていたのだろう。現在に至るまで「私」は夫のことを信頼できなくなっていたのではないだろうか。

さらに「私」の息子に対する気持ちにも変化が生じる。

でも何かが私の神経にさわった。息子に対してそんな風を感じるのは初めてだった。(中略)もちろん私は息子を愛している。心から愛している。でも、そこにある何かが確実に今、私の神経を苛立たせている。

(5)

「私」は、夫に続いて息子の寝顔を見て、その寝顔の「何か」が「神経を苛立たせている」と感じている。「私」は息子にまで若干だが嫌悪感を抱いているのだ。その原因について以下のように書かれている。

(前略)そして何が私を苛立たせるのかを知った。息子は父親と寝顔がそっくりなのだ。そしてその顔はまた義母の顔とそっくりなのだ。血統的になたくなさ、自己充足性——私は夫の家族のそういう傲慢さに似たものが嫌いだった。確かに夫は私に良くしてくれている。優しいし、細かく気を配ってくれる。浮気ひとつしないし、どこまでも仕事熱心だ。真面目でずるいと

ころもなく、誰に対してもわけ隔てなく親切だ。(中略)文句のつけようがない、と私も思う。でもその文句のつけようのなさがしばしば私を苛立たせる。その「文句のつけようのなさ」の中には、何かしらの想像力の介在を許さないような、妙にこわばったところがある。

そして今、息子がそれと同じ表情を顔に浮かべて眠っている。(5)

息子の寝顔に嫌悪感を抱く原因は、息子の顔が夫、そして姑に似ていることにあつた。夫とその家族には「血統的になたくなさ」、「自己充足性」があり、夫は「文句のつけようがない」くらい良い人である。「私」が繰り返し過ごしている決まりきった毎日は、その「血統的になたくなさ」や「自己充足性」から生まれたのだろう。そのような「文句のつけようがない」毎日がやってくることに「私」は苦しむ、嫌悪感を抱いている。

「私」は夫が作り出す日々の「文句のつけようがない」リズムの中に組み込まれてしまい、いつしか自分もそのような日々を過ごすようになっていた。息子の寝顔を見て、「私」の変化のない日々を作り出していた夫の「血統的になたくなさ」、「自己充足性」に対しはつきりと嫌悪感を抱く。前述したが、「私」は不眠になる前も夫のことを愛し

てはいたが、「気に入って」はいなかった。そしてこれが「私」の、夫の気に入らない部分であると考ええる。

そのような夫の家族の血を受け継いでいる息子に対し、「私」は以下のように考える。

この子は成長しても、私の気持ちなんかきつと理解しないだろうと私は思った。夫が今私の気持ちをほとんど理解しないのと同じように。

私が息子を愛していることには間違いない。でもいつかこの先、この息子のことを自分はそれほど真剣に愛せないようになるのではないかと、予感がした。母親らしくない考えだ。世間の母親はそんなこと思いつきもしないだろう。でも私にはわかる。私はある時ふとこの子供を軽蔑することになるだろう。子供の寝顔を見ているうちに、まるで水が急速に引いて地面が露わになるように、それが明確になった。

そう思うと私は悲しくなった。(後略) (5)

夫と同じ表情を息子が顔に浮かべて寝ているのを見て、息子が成長しても「私の気持ちなんかきつと理解しない」と思い、将来「この息子のことを自分はそれほど真剣に愛せないようになるんじゃないか」という予感がしている。そして自身の息子であるにも関わらず「軽蔑することにな

るだろう」とまで考えている。その自分の考えに対し「母親らしくない」と考えていることから、「私」は、母親は息子を愛するものだと考えており、自分自身の息子への母性愛の喪失を感じていることが分かる。不眠生活の中で「私」は夫への愛を失いつつあり、嫌悪感を抱き、息子への母性愛までも失いつつある。

「私」は夫にも息子にも愛をもって接していた。夫は妻である「私」を守ってくれるものだと考えていた。母親である自分が息子を愛することも当然だと考えていた。しかし不眠になってから、その当然だと考えていたことはそうではなかったことに気づいた。「私」が義務的・機械的に日々を過ごしていても、家族はだれも気づきはしなかった。要するに「私」が妻、母、嫁として機能していれば問題はないのである。また、「私」は知らぬ間に、夫とその家族の「血統的なたくなきさ」、「自己充足性」から生まれる「非の打ちどころのない」日々の中に組み込まれていた。知らぬ間に夫の価値観に支配されていたのである。家庭の中で女性(「私」)が男性(夫)に支配されていることが分かる。次に「私」の不眠に対する感情について考えていく。「私」はこの後、「死」というものは、今自身が経験しているような「果てしなく深い、覚醒した暗闇」(5)であるかもしれないと考えるようになる。そう考えた「私」は「激しい恐怖」を抱く。

しかし、一転して再び「私」は不眠を肯定し始める。不眠でも生活できている自分のことを「人類の飛躍的進化の先験的サンプル」(6)と考え、「私」は自分が他の人よりも飛躍し、優れているものと考えている。再び不眠を肯定し、自己肯定を試みていることが分かる。

不眠を肯定した「私」は以下のように考えるようになる。

毎日夜がくると眠っていたころの自分が本当の自分ではなくて、その当時の記憶は本当の自分の記憶ではないように感じられる。人はこのように変化するのだ、と私は思う。でもその変化は、ほかの誰の目にもつかない。誰も気がつかない。私にしかわからない。(6)

「私」は妻、母としての「存在基盤」の上で存在していた以前の自分ではなく、不眠により自己を拡大している現在の自分が「本当の自分」であると考えている。

ところで本作品には何度も「誰も気がつかない」「私にしかわからない」と同義の言葉が出てくる。「私」は誰にも自分の不眠を打ち明けることがなく、誰にも理解できないと考えている。これは「私」の「沈黙」であり、これについて平野葵氏は以下のように述べている。

「私」の不眠とは、いずれの場合も、家族に秘匿し

うるものであり続けているのだ。不眠は、「私」を覚醒させ、抑圧してきた負の感情を解き放つものであるかのように見えて、本質的には形を変えた一種の沈黙^{二六}なのである。

この「沈黙」が「私」をより孤独な状態へと追いやっていくのだ。

次は物語のラスト、「私」が夜中に車で出かけて、何者かに襲撃を受ける場面である。

私の指はぶるぶると震えている。(中略)そして男たちは——その影は私の車を揺さぶりつづけている。

(中略)彼らはこの車をひっくりかえすつもりなのだ。何かが間違っている、と私は思う。落ち着いて考えなくては。落ち着いて・ゆっくりと・考えるんだ。何かが間違っている。

何かが間違っている。

でも何が間違っているのか、私にはわからない。私の頭の中には、濃密な闇が詰まっている。それはもう私をどこにも連れていかない。(中略)屈もうとした時に、私はハンドルに思いきり額を打ち付けてしまう。私はあきらめてシートにもたれ、両手で顔を覆う。

そして泣く。私には泣くことしかできない。(中略)

私はひとり、この小さな箱に閉じ込められたままどこにも行けない。今は夜のいちばん深い時刻で、そして私たちは車を揺さぶりつづけている。彼らは私の車を倒そうとしているのだ。(6)

「私」の車が何者かによつて揺さぶられる。その正体について「顔は見えない。服装もわからない。」(6)にも関わらず、「男たち」と決めつけている。ここには「私」の苦しみが夫と息子という二人の「男たち」が原因であるということが表れているのではないだろうか。

「何かが間違っている。」と思うものの「何が間違っているのか」は分からない。不眠により多少の自由を手に入れることはできたものの、妻、母として日常生活の中の「私」の肉体は家事をこなし、「傾向的に消費」され続けている。結局そこに変化はないのである。「私」は妻、母という役割から逃れることはできていない。

さらに、「私」は不眠の肯定により、「存在基盤」を捨て去ることとなる。しかし「私」は妻、母としての役割を全うし、生きていかなければならない。それが「私」の自己の意識と肉体の分離を強め、自己の存在の揺らぎを感じさせ、苦しみを生んでいるのではないだろうか。「濃密な闇」は「存在基盤」を捨てても眠らないことを選んだ「私」を「どこにも連れていかない」、もう戻れないのである。

しかし「私」は沈黙し続ける。それは自己の意志による沈黙でもあり、また、夫や息子、義母などの他者から強いられた沈黙でもある。「私」が沈黙を破り、自分が何日も眠っていないこと、夫への愛情を失い、息子への母性愛までも失いつつあることを打ち明ければ、周囲から異常者とされるだろう。「私」は沈黙するしかなかった。そしてその沈黙が「私」を孤独にする。

「私」は「この小さな箱に閉じ込められたままどこにも行けない。」「私」は現状を結局どうすることもできず、苦しみから逃れることはできないのである。

四・「ねむり」に描かれる主婦像

まず、不眠になる前の「私」の日常について注目したい。「私」の日常は毎日が「ほとんど同じ」であり、それは日々の区別がつかなくなるほどだった。日々の中で「私」は主に家事や育児などの妻、母としての仕事を行い、空き時間にプールへ行ったり、ウインドウ・ショッピングをしたりと、日常の大半が夫や息子のために費やされていた。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という「性別役割分業」の考え方について、あるデータがある。一九七九年にはこの考え方に「賛成」、「どちらかといえば賛成」と答えた人の割合は合わせて七二、六%にもなる。その後は減少していくものの、一九九七年には五七、八%とまだ

半数以上がこの考えに賛成しており、二〇〇二年に四六、九%と、やっと半数以下になっている。^八本作品が書かれたのは一九八〇年代であり、「性別役割分業」という考え方は今よりも浸透していたと考えられる。男女共に「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」と考えていたのである。この時代はまだ「夫は外で働き、妻は家庭を守るものだ」という考えが根強くあった。ほとんどの主婦は自分が日常の中に「組み込まれて」いることに気づかず、日々を過ごしていただろう。しかし「私」は夫と息子のために生きる、変化のない「ほとんど同じ」日々^九に自分が「組み込まれて」いることに「気づく」。そして「私」はその日常から脱しようとする。妻、母としてではなく、ありのままの自分でいられる時間、自分の好きなことができる時間を何よりも「私」は求めた。そして眠らないということにより、その時間を手に入れたのである。

ここで、「私」が専業主婦であったということに注目したい。日本では高度経済成長期以降、専業主婦の割合は増加し、一九八〇年に最も割合が高くなっている。「私」もまた、二章で述べたような幸福を求め結婚した主婦の一人であるといえよう。一九八〇年代後半には、専業主婦が家庭責任を全面的に担う、その見返りとして、一連の専業主婦優遇策がとられた。このように一九八〇年代は専業主婦が増加しただけでなく、社会政策により専業主婦が家庭に

対し責任を持たねばならないようになっていった。家事や育児には完璧さが求められただろう。本作品の「私」の夫が「自己充足性」のある人物だったことをふまえるとその完璧さはより求められたのではないだろうか。

近代の主婦にとっては家事や育児は妻が夫や子のために行う、「愛の奉仕」であったが、経済成長に伴い、家電製品の普及、外食産業の発達などの要因により、現代の主婦にとって家事は金銭によって購買可能なものとなった。^三よって「家事」は「労働」へ変わり、「家事はできれば極力省力化するべきもので、お金と交換可能なものだ」、という家事に対する意味づけから「家事労働」という言葉が生まれた。家事は女性のアンペイド・ワークの代表格であり、女性が「家事労働」に費やす時間は男性のそれを大きく上回る。また、家事の簡便化により、あらゆる家事をやりきった時に満足感や充実感を得られなくなり、主婦の存在価値が軽くなってしまう^四という意見もある。

以上のことより、「私」が妻、母という日常に知らぬ間に「組み込まれ」、無意識に蓄積された苦しみは相当なものだっただろう。「私」はその苦しみに気づくことができただのである。自己の力で苦しみに気づいたという点で「ねむり」における「私」は、「飛行機——あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」(一九九〇年)の「僕」の不倫相手である主婦とは違う自覚的な主婦

である。しかし、「私」は「リーダーホーゼン」（一九八五年）の母親のように離婚を選択しない。それは、妻、母として生活する日々の中でも、眠らないことにより、ある程度の満足感を得られているからである。妻、母という役割に縛られ、苦しみを感じてはいるが、眠らない時間に「ありのままの自分」を感じることができ「私」には離婚という選択肢はないのである。

しかし、物語は暗い結末を迎える。それはなぜか。「私」は眠らないことにより自分の時間を手に入れることができず。しかし、現実において「私」が妻、母であることには何の変化もない。朝がくれば「私」はまたいつもと同じように妻、母としての義務を果たし続ける。一見すると「私」は不眠により、自分の時間という自由を手に入れたように思えるかもしれないが、役割から逃れることはできていないのである。結局そこから生まれる苦しみからは逃れることができていない。だから「私」は苦しみ続けるしかないのである。「ねむり」における「私」は、現実における妻、母という自分を捨て去ることができなければ、苦しみから逃れることはできないのである。この「沈黙」が『私』を含めた多くの母親たちが陥る孤独と出口のなさそのものを表している^{二五}のだ。

自己の苦しみに気づき、そこから逃れようとするものの、逃れることはできない。日常に「組み込まれて」しまった

専業主婦の苦しみがありありと描かれた作品である。

註

- 一 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納美紀
代編『岩波 女性学事典』（二〇〇二年六月二〇日 岩波書店 一九三頁）
- 二 国際女性学会編『現代日本の主婦』（一九八〇年一月二〇日 日本放送出版協会 三五頁）
- 三 註二に同じ 三六頁
- 四 註二に同じ 三六頁
- 五 井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック（第4版）』（二〇〇五年一月一〇日 有斐閣 一二頁、一三頁）
- 六 註二に同じ 五〇頁
- 七 註二に同じ 五〇頁
- 八 註五に同じ 二、三頁
- 九 註五に同じ 二、三頁
- 一〇 註五に同じ 一四二、一四三頁
- 一一 註五に同じ 一四二、一四三頁
- 一二 浅利文字「村上春樹・意識と肉体の統合に向かう『眠り』（今井清人編『村上春樹スタディーズ2008―2010』二〇一一年五月二八日 若草書房 一七七頁）
- 一三 註一二に同じ
- 一四 平野葵「村上春樹『ねむり』と『アンナ・カレーニナ』」

「北海道大学大学院文学研究科研究論集」(二四 二〇一四年

一二月二〇日)

一五 註一四に同じ

一六 註一四に同じ

一七 花田俊典『眠り』昏睡する『私』(『国文学』第四三卷第三号、一九九八年二月)は、「私」を襲撃した二人の影について、夫と息子である可能性を指摘している。

一八 註五に同じ 一四〇、一四一頁

一九 註五に同じ 八四、八五頁

二〇 中嶋公子『高学歴専業主婦』のゆくえ(棚沢直子・中嶋公子編『フランスから見る日本ジェンダー史 権力と女性表象の日仏比較』二〇〇七年五月一〇日 新曜社 一二九頁)

二一 瀬地山角「主婦の比較社会学」(井上俊・上野千鶴子・

大澤真伸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 第19卷〈家族〉の社会学』一九九六年一〇月二五日 岩波書店 二二二頁)

二二 註二〇に同じ

二三 註五に同じ 一四二、一四三頁

二四 註二に同じ 四一頁

二五 註一四に同じ

(平成二七年度 本学卒業生)